

あしなが育英会会長の玉井義臣さん(86)の活動の出発点は交通遺児の支援だった。事故や災害などで親を亡くした国内外の子どもにも奨学金を届け始めて50年以上がたつ。遺児の救済を天職だと思いついてきました。寝ても覚めても考えるのは、どうすればお金が集まるか。寄付事業はモノやサービスの商売よりずっと難しいと思います。メッセージで人の心を打つ必要があるからです。



遺児支援は単なる金貸しではありません。未来をつくることです。高い志を持って勉強し、人を支える側に回ってほしい。どんな困難にも立ち向かい、挫折しても再び立ち上がる生き方をしてほしい。そう伝えてきました。実際に成人した遺児たちが社会で活躍しています。

公的な助成金には一切頼らず、「あしながさん」と呼ぶ市民から託された累計1100億円を元に、国内

あしなが育英会会長 玉井 義臣さん 遺児の心にかける虹 ①



「恨み節」が原動力 街頭募金で奨学金

外の遺児11万人を高校・大学へ進学させてきた。奨学金は貸与に加え、2018年度から給付型も始めました。子どもたちの役に立てばとの一心で、見返りを求めず募金してくださる方が途切れないおかげで支援の裾野を広げていきました。振り込みでの寄付のほか、街頭でいただく10円、100円という額も大きな力になります。市民の善意の集積です。毎年春と秋の年2回、全国の駅前などで学生遺児が街ゆく人

に募金を呼びかける「あしなが学生募金」は1970年に始まりました。「かわいそう」との声もありましたが、心を鬼にして「街頭に立ちなさい」と厳しく言い続けてきました。信念を曲げずに続けてきたからこそ、育英会を多くの人に知ってもらえました。遺児が勇気を出して思いを発信し、成長できる教育の場になりました。

新型コロナウィルスに見舞われた20年春は街頭募金の開始から50年がたち、第100回となる節目だったが、初めて中止に。今なお再開の見通しは立たない。コロナ禍はひとり親の家計を直撃しました。20年4月に育英会の保護者に緊急アンケートをすると、「食費がない」「路上生活するしかない」と悲痛な声が寄せられ、命の危険さえ感じました。即座に65000人の高校・大学生らに一律15万円、総額10億円の支援金を給付すると決めました。

「安心して勉強なりお母さんの手伝いなりやってください。君たちを守るから」。昨年4月の記者会見でこう語ったのは、街頭募金が中止になっても資金は必ず集まると信じていたからです。実際に20年度は過去最多の7771人の奨学生に総額57億円を送りました。

コロナ禍で寄付が増えた一方で、困窮して奨学金を申し込む学生がそれ以上に膨らんでいます。子どもたちが進学をあきらめずに済むよう、まだまだ注視する必要があります。

半世紀も活動を続けてこられた原動力は「恨み節」です。戦中戦後の貧しさ、愛する2人の女性の死が私を本気にさせたのです。

(松浦奈美が担当します)